上品野遺跡調査報告（県建設部分）

例 言

１．本書は、瀬戸市上品野町に所在する上品野遺跡(県遺跡番号03678)の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、国道363号線の拡張工事に伴い、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

３．調査期間は平成９年度の７月から９月である。

４，調査担当者は、北村和宏(課長補佐兼主査、現愛知県教育委員会文化財保護室)・小澤一弘(主任、現主査)・後藤英史(調査研究員、現名古屋西高校教諭)である。

５．発掘調査時の航空測量に関して、アジア航測株式会社から支援を受けた。

６．発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

国土交通省愛知国道事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター (五十音順、敬称略)

７．本書の執筆は、川添和暁が担当した。

８．調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。ただし、旧基準(日本標準座標)で表記してある。

９．調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

1．地理的環境・歴史的環境

上品野遺跡は、瀬戸市東部、上品野町の品野盆地の東端に位置する。ここは南東側から舌状に伸びる丘陵の末端部にあたり、東を流れる中洞川と西を流れる大洞川が、北で水野川に合流する地点である。標高は180m～200mを測り、南東から北西方向に向かう緩斜面上に位置する。

この品野町近辺は、中世以降、現代にまでつながる窯業生産の中心地であり、周囲には多くの窯跡の所在が、知られている。また、最近の発掘調査の成果により、窯業遺跡のみならず、各時代の様相が徐々に知られるようになってきた。特に、古代の遺跡･遺物としては、上品野蟹川遺跡が知られている。ここでは、平成12･13年度の調査で自然流路のから「山寺」･「山」･「阿」･「門」･「文室門」(ふんやのもん)などと墨書された灰釉陶器がまとまって出土しているのは、注目されよう。また、付近には中世以降の山城として、品野城跡や桑下城跡が所在する。

2．調査の経緯と経過

国土交通省が計画した東海環状自動車道建設に伴い、国道363号線の拡張工事が行われることとなった。当調査は、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて受けた委託事業として行われた。調査期間は平成９年度の７月から９月までで、面積は合計360㎡である。

調査は、国土交通省愛知工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業も併行して行っていた。調査時には両者を区別することなく、工程上97Ａ区として調査を行った。当調査範囲はこの97Ａ区の北側部分である(図１)。

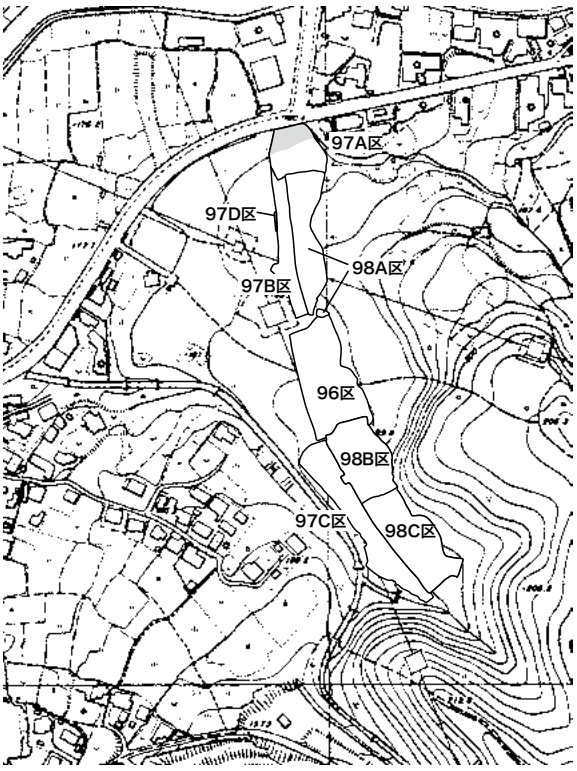


図１　調査区位置図(5000分の１)
トーン部分が当調査範囲

3．遺構・遺物

遺構は竪穴住居跡1軒・土坑50基程度が検出された。遺構の残存状況は悪く、一部痕跡を残している程度である。遺物の出土がほとんど皆無ではあるものの、上品野遺跡調査区域全体の様子や、遺構埋土の状況などから、竪穴住居は古代、その他土坑の多くは中世期のものと考えられる。土坑は柱穴が主体であると考えられ、一部は１間×２間の掘立柱建物の可能性もある。

4．まとめ

上品野遺跡の調査区自体は、本調査区から南側に長く広がっており、後期旧石器時代初頭、縄文晩期～弥生時代、古墳時代初頭、古代、中世と、各時期で遺構の展開がみられる。特に当調査区を包括する97Ａ区と南側に隣接する97Ｂ区・98Ａ区では、灰釉陶器を主体とする古代の遺構が多く見つかっており、これらとの関係を考慮する必要がある。

以上のことを受け、国土交通省愛知工事事務所委託分の報告書(平成18年度刊行予定)に詳細な成果を掲載予定である。



調査区全景（南より）



図2　調査区全体図（250分の１）

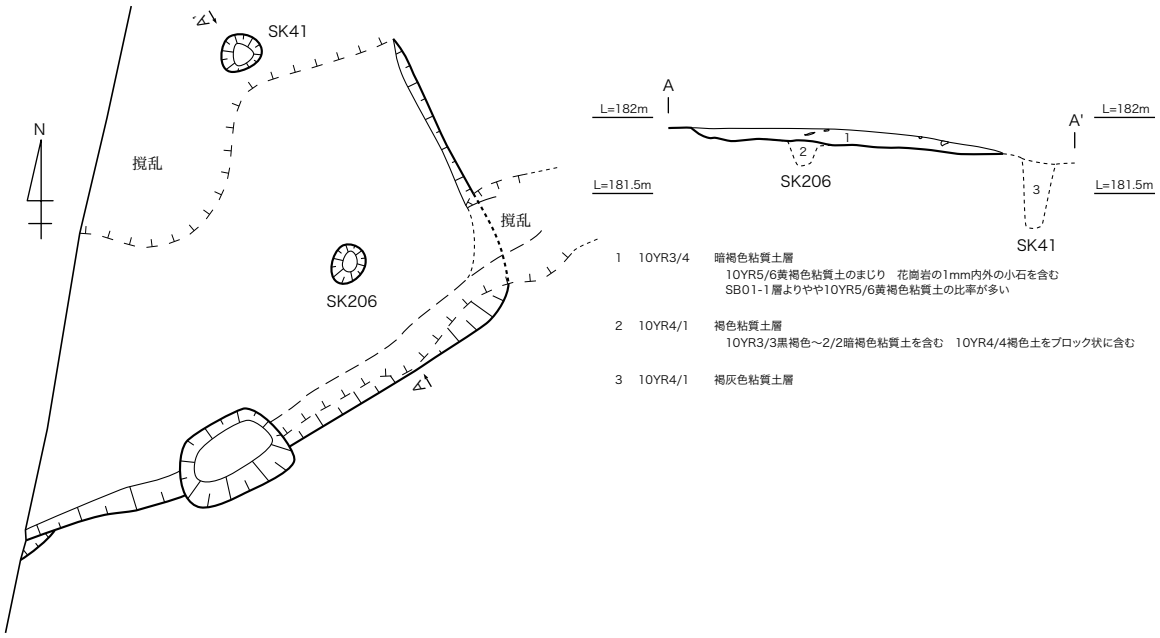


図3　SB05（50分の１）

本書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の
２万５千分の１地形図を複製したものである。
（承認番号　平16部複　第220号）

年報　平成 16 年度

平成17年3月
編集・発行(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
印　刷　(株)クイックス

本書は再生紙を使用しています。